《紹　介》

米田賢次郎著『中国古代農業技術史研究』

高谷好一*

1．中国史家の論文集

著者の米田賢次郎氏は1919年和歌山県生まれ，京都帝国大学文学部史学科（東洋史専攻）を卒業，同大学大学院に進んでいる。その後，京都大学人文科学研究所助手を経て，滋賀大学教育学部講師，助教授，教授を歴任，1980年からは仏教大学教授となり，現在に至っている。同氏はこの間，経済学出身の農業史家天野元之助氏や農学者たちと研究会を重ね，今風にいえば，農業史を中心とした学際的研究を続けてきた。『中国古代農業技術史研究』はこうした米田賢次郎氏の積年の労作を一冊にまとめた論文集である。

本書は序論に続いて，第Ⅰ部技術論，第Ⅱ部土地利用論，第Ⅲ部土地制度論からなり，全部で10編の論文が収められている。さらに巻末には2編の論文が補論として添えられている。

2．各論文の梗概

序論として収録されているのは「華北乾地農法と一荘園像 ―『齊民要術』の背景」である。米田氏は『齊民要術』（以下『要術』と略記）を中国古代農業理解のための基本的文献として繰りかえし取りあげ，それを素材にいくつもの論文を物にするのであるが，それらの諸論文を開陳するにあたって，まずこの論文を序論として置いている。この論文が『要術』時代盛んであった荘園経営の素描をしており，それは当時の農法や社会の輪郭を比較的うまく示しているからである。具体的には荘園における穀田の耕作，さらには野菜や果樹，桑といった換金作物の栽培，食料加工，そしてさらには，荘園間の経済関係などが論じられている。ここで著者が何よりもまず最初に言わんとしていることは，華北は基本的には天水に頼る乾地農法の世界であるいうことである。

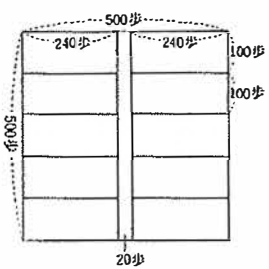
本論に入って第Ⅰ部には4編の論文が収録されている。その第一は「耦耕芻言」である。ここでは耦耕とは何かについて著者の見解が延べられている。耦耕に関しては，これまでにもいろいろの解釈があった。たとえば，西山武一氏は，それは一人がスキを踏み込み，別の一人がそのスキにつけた綱を曳いて土を掘りおこす，いわゆる鐵犂であるとしている。天野元之助氏は耕・種一貫作業を耦耕というのだとしていた。ほかにも種々の説があった。そのなかにあって，米田氏は『呂氏春秋』に表れた耦耕を分析し，それは「二人が六尺の距離をおいて互いに向いあい，各人大略三尺づつの甽を作りながら，横に移動してゆく」，その作業だとしている。もっとも同氏は，これは『呂氏春秋』の耦耕であって，他の時代や他の場所では，まったく違った作業を耦耕という言葉でいい表していたのが実際であったであろうとしている。

第二の論文は『呂氏春秋』の農業技術に

*たかや　よしかず，京都大学東南アジア研究センター

関する一考察 ― 特に『氾勝之書』と関連して ― 」である。ここでは『呂氏春秋』の畑は長さ6尺，幅1尺の畝と甽を交互に作り，その畝上に2行，6寸の間隔で播種する園芸的なものであったとしている。このことを同氏は『氾勝之書』の区田法から援用していうのである。ここに出てくる長さ6尺の畝と甽というのが，先に同氏の述べた耦耕に直接関係してくるものなのである。著者はこうした区田法型の農法は秦漢時代にはすでに小農の間で標準的に見られたものであったとし，当時の技術がすでにかなり高いレベルに達していたと強調している。

第三の論文は「240歩1畝制の成立について ― 商鞅變法の一側面 ― 」である。古代においては公定地積は100歩1畝制であったのに，後にはそれが240歩1畝制になるのは何故かを論じ，著者はそれは秦の商鞅の變法にかかわっているとしている。米田氏によると，商鞅の改革は富国強兵をねらったもので，そのためには官制や邑制はもちろん，田制もまた軍制にならって整理しなおしたのだという。ところで，この軍制，邑制の末端組織は5人組であった。このために，耕地に関しては500歩四方を規準にしてそこに二組の5人組を入れた。この際，中央に幅20歩の道をとると，図に



示すように，一戸の持ち分は240歩×100歩になり，まさに240歩1畝の新畝制が誕生したというのである。そして，この以前に比して，2.4倍になった一戸あたりの耕地面積はおりから普及しかけていた牛耕耕作にまさにうまく適合したというのである。

第四論文は「趙過の代田法 ― 特に犂の性格を中心にして ― 」である。漢の武帝は趙過を登用して代田法を実施させた。その代田法なるものの実態は何であったのかが本論文の主題である。代田法というのは前年の甽は今年は壟にし，前年の壟は今年は甽にするという地拵えである。著者は論文中ではそれに用いた犂について論じ，それは単なる作條犂ではなく，深耕の可能な耕犂であったとしている。そしてそこからさらに議論を展開し，結局それは天水畑ではなく，灌漑畑作であったに違いないと結論している。深耕して灌漑するという高級な農法を考えているわけである。さらに加えて，この高級な農法は武帝の時に始めて現れるのではなく，もっと以前からあった古法で，ただ武帝はそれを宣伝，普及させたにすぎないと主張している。漢初より力を持ち続けていた商人を押さえて官僚の力を確立させるためには官僚が地盤とする農業セクターの強化が必要であった。こうした情勢のなかで，趙過を登用し振興したのが代田法であり，その意味ではいわば政策的に発掘された古法が代田法だ，というのが米田氏の主張である。

以上が第Ⅰ部を構成する四論文である。

第Ⅱ部は土地利用論であるが，ここには畑作にかかわる論文が2編，水稲作にかかわるものが3編，計5編が収録されている。第一論文は「『齊民要術』と二年三毛作」

である。一般に中国の二年三毛作は唐代になって小麦が普及するようになってから現れるといわれている。しかし著者はそうではなく，すでにそれは『要術』の時代にはあったと主張する。『要術』巻頭雑説に穬麥，黍，豆の二年三毛作が見えるからである。さらに著者は『要術』中にしばしば現れる「暵」に新解釈を与え，自説を補強している。旧来は「暵」は耕起して風日に曝す作業とされ，この作業の故に二年三毛作は不可能とされていたのであるが，米田氏は，暵とはいわば「土寄せ」のような作業で，暵をしていても二年三毛作は可能なのだと論ずるのである。こうして『要術』の二年三毛作を立証した同氏は，これは実際には漢代にまで遡りうると主張している。同氏によると，旱魃常習地の華北では不安定性に対抗するためには作季を増やすことはきわめて必要なことであったとし，そうした状況のもとで，農民が漢代に二年三毛作という方法を編み出したというのはいわばごく自然なことであったとしている。同氏はこうして，漢代には不安定性除去のための二年三毛作があったとし，そしてそれが唐代に至ると，今度は経済性のための二年三毛作に転化してゆくのだと主張する。

第二論文は「中国古代麥作考 ― 二年三毛作成立の再検討 ― 」である。これは先の『要術』二年三毛作論に対して行われた批判に応えて書かれたものである。ここではまず『要術』の暦のことが論じられてい，『要術』では節月を使用している確率が高く，したがって作季は陽暦に換算して正確に理解しうるとしている。そして，問題の二年三毛作はやはり漢代には確実に存在していたと論じている。ただ，その普及率は面積にして20％台を越していなかったから，農書は年一毛作を中心に書かれているのであり，だから多毛作を考える時には「所謂，行間の文字を読む必要がある」のだとしている。さらに続けて，禾麥輪作を可能ならしめる条件は戦国末期には存在していたのであるから，二年三毛作もそこまで溯上させられる可能性があるのだと主張している。

第三番目は「應劭『火耕水耨』注より見たる後漢江淮の水稲作技術について」である。ここでは，いわゆる火耕水耨を論ずるわけであるが，それを特に『漢書』につけられた應劭の注の場合について論じている。米田氏によると，ここでの火耕水耨というのは條播であり，除草に注意のゆきとどいた連作稲作であるということになる。しかし，同時に同氏は，この火耕水耨という言葉はそれが用いられている文章ごとに内容を異にしているらしいから，その内容は実際にはケース・バイ・ケースであったとしている。この論文は西嶋定生氏の説に対する批判というかたちで書かれたものである。

上記の米田論文に対して西嶋氏からの応戦があり，さらにそれに又挑戦するというかたちで出されるのが，次の第四論文「漢六朝間の稲作技術について ― 火耕水耨の再検討を併せて ― 」である。米田説と西嶋説の違いは，米田説が火耕水耨は條播，連作だとするのに対して，西嶋説は移植，一年休閑稲作だとする点である。この論争を読んでいると，言葉の解釈が微に入り細にわたって展開されており，訓詁学の面目躍如たるものが感じられる。一例をあげると，たとえば「抜而栽之」の解釈である。西嶋氏はこれを移植としているが，米田氏はそうは訳さない。これは直播田の除草中

に行われる補植だとしている。こうした議論を展開して米田氏は漢六朝間の揚子江下流域においては移植を示す資料は皆無だとする。また休閑を指示する資料も存在しないから，結局，当時の揚子江下流にあったとされる火耕水耨は直播，連作だとし，自説を繰り返して主張している。ちなみにいうと，火耕水耨に関する私どもの考えは福井捷朗氏が『農耕の技術』第3号に「火耕水耨の論議によせて」として発表したようなものである。この福井論文は，米田，西嶋両氏も出席されて1979年に行われた『中国江南の稲作文化』シンポジウムで福井によって発表されたものである。

第五論文は『陂渠灌漑下の稲作技術』である。前掲の火耕水耨論文が揚子江下流のフロンティアの稲作を扱ったものであるのに対して，この論文はその背後にある江淮の稲作核心地帯を対象としている。この核心地帯の稲作に関しては次の5点が主要な事実だったと米田氏はしている。すなわち，①水利を整備することによって田畑輪換をなしうるという技術が先秦時代から存在していた。②とはいえ，畑作よりは水稲耕作の方が好まれた。③前漢時代になると，すでに連作が行われていた。④後漢時代になると一部では田植が行われていた。⑤西晉時代になると火耕水耨の直播法は過去の農法となり，新しい農法として移植が入ってきていた。このように技術展開過程を整理したうえで，同氏はさらに次のようにいっている。すなわち，結局は後漢になって荘園経営が江淮へ進出することによってそこの陂渠灌漑施設は急速に充実し，それがバネになって，移植稲作が大展開することになった，というのである。

第Ⅲ部は土地制度論にかかわるもので，ここには「華北乾地農法より見た北魏均田規定の一解釈 ― 『齊民要術』の背景その2 ― 」1編が収められている。遊牧民の拓跋氏北魏が中原の漢民族の間に遷都してくるに際して行われたのが北魏均田制であるが，それは如何なる政治的配慮のもとに行われ，そして『要術』的農民には如何なる影響を及ぼしたのかが論じられているのであるが，その結論は次の2つの点にしぼられている。第一は，この均田制は根拠地を離れて遠く異境の中原へ移動してくる北方民族のために十分な土地確保をねらって行われたものであった，ということである。第二は，とはいえこの土地確保は実際には無住の地で行われたから，『要術』的農家に与えた影響はほとんどなかった，ということである。そして著者は最後に，こうして優遇された北方民族であったが，結局はその低い土地経営能力の故に，南下後まもなく，有能な漢族農民の前に破れ去っていったのだと結んでいる。

以上が本論に収録された論文である。ただこれらに加えて補論としてさらに2編が付けられている。「中国古代の肥料について ― 二年三毛作成立の一側面」と「所謂『齊民要術巻頭雑説』について」である。前者では同氏の主張する『要術』の二年三毛作を補強するものとして漢代からの高度な肥料使用を例證してある。後者では，巻頭雑説は『要術』よりも古くに作られたものであることについて論じている。

3．読後感

実際に漢籍を繙いたこともなく，現地を訪れたこともない私が，この書の読後感を

述べるなど無謀であり，失礼の極みであるのだが，非漢学者の間での話題の糸口にでもなればと思って，あえて筆をとる次第である。

本書を通読して私の強く感じたことは，米田氏は漢学者であると同時に，すぐれた現場観察者であり，時に緻密な設計技師のような所がある，ということであった。さきに述べた「抜而栽之」の議論の展開などを見ていても，現場のことをかなりよく知った人の議論という感じがして，真偽のほどはともかくとして，実に面白かった。この種の議論展開はこのほかにも本書中には随所にみられる。たとえば，『要術』の「稲無所縁。唯歳易為良」の解釈がまたそうである。ふつうこれは「稲はどこに植えてもよい。唯休閑しなければならない。」とされているのだが，米田氏はこれを「唯，他作物と輪作しなければならない」とする。休閑と輪作とでは実際にはたいへんな違いがあるわけである。米田氏は，同氏が抱いている華北農業は太古から極めて高度なものであったという信念のために，こういう読み方をするのであろうが，ここでもまた真偽の程はともかく，その議論には臨場感があり，迫力がある。

似たようなことは氏の耦耕に関する解釈に関しても窺える。ここでは『呂氏春秋』から直接的には無理だとなると『氾勝之書』から外挿するわけだが，その時，『氾勝之書』の記載をきちっと図面に引いて考えている。その様はまるで設計技師の几帳面さがあり，説得的である。

こうした目で本書を見てみると「歳易為良」「耦耕」「区田法」「代田法」「火耕水耨」等々魅力ある題材がいたるところに見いだせる。米田氏自身の解釈はすでに示されているわけだが，それはそれとして，われわれ技術畑の者がもう一度それを見直してみるとたいへん面白い結果がでるのではないかと思われる所が多い。そういう意味では本書は漢学者が技術系の人たちのために用意して下さった一種の宝の山という感じさえする。

読後感の第二は，米田氏の主張する華北農業の先進性は結果としては了承するのであるが，資料の整理が十分にされないままに議論が展開されているために，いささか牽強附会の観なきにしもあらずといわねばならないということである。私どもの農業地理学の分野からすると，中国には3つの農業類型があるように考えられる。第一はオアシスにおける園芸的灌漑農法，第二はそれよりは少し降雨のある所で行われる乾燥農法，そして第三は多湿な江南などの移植水稲農法である。そして，これらはかなり独立的な存在と私たちは考えている。たとえば，オアシスでは農業開始の全くの最初から，栽培は小区画畑での灌漑農業として行われたに違いない。そこではたぶん，その最初期から施肥と多毛作はそれに伴っていたであろう。そのかわり，犂耕などというものは，ずっと後に至るまで不要であった。一方，乾燥農法の地帯では犂耕や畜力播種技術は早くから高度に発達していた。しかし，灌漑はもちろん出てこないし，多毛作や施肥も普通はなかなか出てこない。

似たようなことは水稲作についてもいえる。たとえば，オアシスの小区画畑に稲が導入されたとしよう。その稲作は最初から移植で行われた公算がきわめて高い。オアシス農業はそういう体系を持っていたから

である。一方，乾燥農法地帯に導入された稲作は，谷地での水稲であっても，まず間違いなく直播になっていたであろう。そして，江南などの過湿地に入った稲は，そこの環境が原始的であればあるほど移植になる可能性が大きい。

稲作技術の進歩ということについて見てみても農業類型区ごとの差はある。江淮の間だと水稲技術の高度化とは直播栽培から移植栽培への変化であろう。しかし，江南だともうそれは逆になる。移植法から直播法への進化ということが考えられる。農法の進化というのは，だから生態区ごとに違った道筋を通り，それらを一律に定式化して論ずることはできないのである。

いささか横着なことを言わせてもらうとすると，私などには『氾勝之書』はどうもオアシス灌漑農業に目を向けているように見える。一方，『要術』はすぐれて乾燥農法中心である。もしそうだとすると，両者を無差別に混ぜて論ずるときには問題を誤った方向に持っていく危険性が大きい。水稲作における『要術』と應劭の『漢書』注についても似たようなことがいえる。前者はどちらかというと乾燥農法の影響の大きい江淮を，後者は過湿な江南型の地区を対象にしているらしいのである。米田氏の用いた諸資料は，だからもう一度この農業類型という座標軸の上に置きなおしてみて，鳥瞰してみるとより鮮明な像を結ぶのではないかと，そんなように思えたのである。

もっとも，こういうことは漢籍学者の米田賢次郎氏に要求するべきことではない。これはむしろ農学者や農業地理学者にあずけられた問題というべきである。『中国古代農業技術史研究』はこういう意味では，まさに再探検のやりがいのある宝庫である。

米田賢次郎氏の積年の労作に今一度深い敬意と感謝の意を表して筆をおきたい。

（1989年，同朋舎出版，15,000円）